

Journey to my PhD@York in イギリス Vol.8

浅野 貴博

University of York

Social Policy and Social Work

はじめに

前号の執筆者短信で触れましたが、今年の夏に博士論文を提出し、その後のVivaと呼ばれる口頭試問にも無事合格しました。私の連載は今回が最後となるため、博士号（PhD）の取得というJourneyを終えての振り返りをして連載を終えたいと思います。

From goal to step

4年に渡って格闘してきた博士論文を提出した後に私の胸に去来したのは、それまで想像していたものとは違った思いでした。研究室を共にする博士課程の同僚が、ひとり、またひとりと博士論文を提出し、誇らしい表情で研究室を去って行くのを見送りながら、彼らの喜びはいかほどのものかと想像していたのですが、私が博士論文を提出した時に感じたのは、何とか予定の4年以内に提出することができほっとしたという思いでした。納得のいく論文を書けたことに対する大きな達成感はありませんでした。これは、私の中でPhDに対する捉え方が変わったことが影響を与えているように思います。留学する前や1年目ぐらいまでは、PhDの取得が大きなゴールだったのですが、博士論文に取り組む中で、研究者として研究を続けていくことの厳しさを肌で感じ、これからの研究者としての

長いキャリアの中での大きなステップというふう捉え方が変化しました。アカデミックの世界は、いわゆる「Publish or Perish（発表せよ、さもなければ滅びよ）」という言葉が示す通り、分野を問わず、研究者は研究論文を出し続けることが必須です。PhDを取得することは、そうしたアカデミックの世界へのパスポートのようなものではないかと思えます。この連載のタイトルになっているPhDの取得というJourneyが終わりを告げても、研究者としての新たなJourneyが始まります。その新たなJourneyに踏み出す上で、留學生活を通して得られた様々な経験は私に多くの学びを与えてくれました。

新たなJourneyに向けて

第2回の連載（※第14号）で述べましたが、留学という決断をする上で大きなきっかけとなったのは、留学する前に勤務していた京都国際社会福祉センターでの様々な経験でした。京都国際社会福祉センターでは、社会福祉士の養成教育だけでなく、ソーシャルワーカーを始めとした対人援助職の継続教育にも携わり、それらの機会を通して得られた「専門職としての学び（Professional Learning）」というテーマについて、日本とは異なる環境に身を置き、多様な視点から研究を深めたいという思いで、留学することを選びました。

留学経験を通して得られたことのひとつに、他の対人援助職と比較し、しばし「なんでも屋」

(Jack of all trades) と評されるソーシャルワーカーに対する捉え方が大きく変わったことが挙げられます。アメリカ、そしてイギリスという異なる文脈からソーシャルワーク／ソーシャルワーカーを捉え直す機会を通して、ソーシャルワーク／ソーシャルワーカーの多様なあり方の可能性への気づきが得られました。博士論文では、日本のソーシャルワーカーへのインタビュー、そして、彼らに関する様々な学びの場の観察から得られた質的データを元に、資格取得後の専門職としての学びのあり方を考察しました。インタビュー協力者は、社会福祉士（または精神保健福祉士）の国家資格を有し、社会福祉関連の現場で10年程度の実践経験のあるソーシャルワーカーですが、その多くが、自身をソーシャルワーカーと呼ぶことにためらいを持っており、それぞれの専門職としてのあり方

(Professional ways of being) を抜きにしては、彼らの学びは理解することができないことが明らかとなりました。つまり、ソーシャルワーカーとしての彼らの学びは、彼ら自身の専門職としてのあり方と分ちがたく結びついていることが指摘できます。しかし、現在の社会福祉士養成教育、及び継続教育の枠組みの中では、関連知識・技術の習得が中心であり、専門職としての学びとソーシャルワーカーのあり方 (Ways of being a social worker) を結びつけた理解、さらに、そうした理解に基づいた具体的な取組みが不足しているといえます。これから大学での福祉教育に従事する上で私が大切にしたいのは、様々な関連知識・技術の枠を理解した上で、その枠内だけでソーシャルワーク／ソーシャルワーカーを捉えることに留まらず、その枠自体を問い直すことで様々な可能性を模索し、自らの専門職としてのあり方を問い続けていくことのできる学びの場を、ソーシャルワーカーを目指す学生と共に創り上げることです。

さらに、社会福祉士養成教育と比較すると、実践及び研究が不足している現任のソーシャルワーカーの継続教育にも積極的に関わりたいと考えています。博士論文では、インタビュー協力者が、研修に代表されるフォーマルな学びだけではなく、援助職同士の自主的な勉強会や集まり等のインフォーマルな学びの機会を通して様々な学びを得ており、専門職としての学びをフォーマルとインフォーマルな学びに分けて捉えるのではなく、多様な学びのあり方を尊重した上で、ホリスティックに捉える必要があることが明らかとなりました。様々な制約の中、フロントラインで日々試行錯誤を繰り返しながら支援に携わるソーシャルワーカー同士が、支え・支えられ、専門職としてお互いが成長し続けられる学びのあり方を共に模索していきたいと考えています。

おわりに

この連載は、マガジンの編集員の千葉さんより声を掛けて頂いたことがきっかけで始まりました。引き受ける前は、単発の原稿ではなく、連載する必要があるということで、正直なところ、博士論文の執筆で忙しい中、時間的にやりくりが出来るかどうか不安に感じて、お断りをしようかという考えが頭をもたげたのですが、せっかく頂いたチャンスですし、本当に忙しくて時間が取れない時は休載すればいいと思い直し、引き受けることにしました。計8回の連載の中で、ヨークでの留学生活を通して感じたことを思うままに書いてきましたが、このような形で文章としてまとめる機会がなければ、忙しい日常に紛れてしまい、改めて振り返って考えることもなかったと思います。私が書いたものが、読んで下さった方々の考えるきっかけになったとしたら幸いです。最後になりましたが、このような貴重な場を与えて頂きましたこと、心より感謝申し上げます。(了)